

〈研究論文〉

## 中上級レベルの日本語学習者の作文教育

意見文にみる語彙・漢字使用及び誤用の分析結果を踏まえて

大塚 薫  
林 翠 芳

### 要 旨

本研究は、漢字圏で日本語学習者が多い国である中国・韓国、そしてタイ、インドネシア、スウェーデン等漢字圏ではない国の中上級レベルの日本語学習者を対象に共通の課題を与え、それに対する意見を書かせた作文を収集した上で、作文中に使用されている語彙並びに漢字、作文中の誤用に関して分析したものである。

意見文中に見られる各学習者の語彙を日本語能力試験の語彙レベルを基に分析した結果、漢字圏の学習者である中国人、韓国人、漢字圏以外の学習者の順で難しい語彙及び漢字を使用し作文を書いていることが分かった。また、作文中に見られる中国人学習者の誤用を分析したところ、母語である中国語の漢語語彙や中国語的表現による干渉、直訳による干渉等が多く見られた。これにより、学習者の作文中に使用される語彙及び漢字は、母語の影響を強く受けていることが明らかになった。

このような結果に基づき、母語を踏まえた語彙及び漢字教育の必要性を感じるとともに、学習者が日本語の不自然な使用に自ら気づき調整するために必要な作文教育方法について検討していく。

### 【キーワード】

日本語学習者、中上級レベル、漢字圏、語彙・漢字・誤用分析、母語干渉

### 0. はじめに

本研究は、初級レベルの学習が修了した中級レベル以上の日本語学習者を対象としている。著者は、長年にわたり高等教育機関において上級日本語学習者に対して作文授業を試みてきた。上級学習者の多くは、四技能の中でコミュニケーション能力が問われる会話及び聴解に関しては問題がなくても、作文に関しては文法、表現、表記上の問題点もさることながら、論理的な叙述に関する基本的な知識が欠如し、文、段落、文章レベルにおいてどのような構成が客観性があり、論理的な文章になるのかという視点が欠落していた。

そこで、本研究は、日本語学習者が多い国である中国・韓国、その他タイ、インドネシア、スウェーデン等漢字圏以外の国における中級から上級レベルの日本語学習者を対象とし、共通の課題を与え、それに対する自分の意見を600字から800字程度で述べてもらった作文を語彙及び漢字、並びに作文中の誤用の観点から分析していく。

そして、それらの相違がどのような原因によるものかを各国の学習者の作文と比較調査した上で、中上級学習者であるにもかかわらず、論理的な文章が書けない学習者が多い現状に関する原因を語彙の観点から探るとともに中上級レベルの作文教育方法について検討していきたい。

## 1. 研究に至った経緯

本研究は、筆者が次の2つのデータベースの収集及び分析に関わったことが着想に至った経緯になっている。林は、1994年度から5年計画で始まった文部科学省研究費（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」（研究代表者：水谷修、課題番号：10NP1001）の研究班3内の研究課題「表記・表現に関する実験的研究（研究分担者：中野洋）」の研究協力者として1996年から第一言語が第二言語による作文にどのような影響を与えるかを研究テーマとして、日本語作文と中国語作文の収集と分析を行い、「日中作文コーパス」を公開した。

その後、大塚は、1999年度-2000年度文部科学省研究費「日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築」（研究代表者：前田（宇佐美）洋、課題番号：国11691041）の研究協力者として韓国人日本語学習者の作文を収集・整理しデータベース化し、その分析・考察の一環を担った。

前者の作文調査は、「中国流行歌の変化 日中流行歌の対照研究」という講演を日本語学習者を対象に行い、その講演を聞いた後の感想文を書いてもらうという方法で行われた。後者は、①できごとを時間順に叙述する作文「あなたの国の行事について」、②論理的に意見を述べる作文「たばこについてのあなたの意見」の2つの課題の中から日本語学習者自身に選ばせ、日本語で書いてもらった後、自分の母語で翻訳してもらうという方式で実施された。

そして、今回の研究は①「英語は小学校低学年のうちから勉強するべきか」②「携帯電話は小・中学生に持たせたほうがいいのか」という2つの課題の中から日本語学習者に自分の書きたい方を選ばせ、意見文を書いてもらった後、

漢字圏の学習者として①中国、②韓国のグループと、③その他の漢字圏以外のグループに分け、どのような語彙・漢字の使用及び誤用がなされているかの比較調査を行った。

漢字圏である韓国人学習者は、作文中に母語を直訳した表現が多く、初級の学習者でも漢語系統の語彙を使用することができるという調査結果があり(大塚1999)、漢字圏の学習者は作文中に使用される語彙において漢語系統の語彙が多いと予測される。そこで、各国の日本語学習者が選択する語彙及び漢字が日本語能力試験の4級レベルから1級レベルの語彙表及び漢字表の何級レベルに相当しているか、作文中の日本語表現は適切なものかについても調査を進め、日本語のレベルに見合った作文運用能力が備わっているのかについても語彙の観点から分析を実施した。その上で、中上級レベルの作文教育における語彙指導に関する提言を行っていきたい。

## 2. 作文資料収集方法

本研究で対象とする作文は、以下の方法で収集された。

期 間	2005年度～2009年度 第2学期
授 業 名	共通教育日本語Ⅲ
使用教材	『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
対 象	2005年度～2009年度における共通教育日本語Ⅲ受講生69名 (内訳 中国：30名 韓国：17名 スウェーデン：8名 タイ：5名 ベトナム：2名 インド：2名 インドネシア：2名 ラオス：1名 ポーランド：1名 マレーシア1名)
学習者のレベル	日本語能力試験2級～1級程度
収集方法	授業の課題として「英語の早期教育」または「携帯電話の早期保持」に関する意見を600字～800字程度で書き、担当教員にメールで送信

今回対象とした作文は、2005年度から2009年度にかけて第2学期に高知大学の正規の授業として開講された共通教育「日本語Ⅲ」の授業において、高知大学に留学している留学生69名によって書かれたものである。日本語Ⅲは、毎年留学生を対象に第2学期に週に2コマ、15週間(計45時間)にわたり開講される共通教育の日本語科目である。日本語Ⅲを受講している留学生の母語は多言語であり、中国語話者30名が最も多く、以下韓国語話者17名、ス

ウェーデン語話者8名、タイ語話者5名、ベトナム語・インド語・インドネシア語話者各2名、ラオス語・ポーランド語・マレーシア語話者各1名の順になっている。また、学習者のレベルは日本語能力試験の2級から1級レベルであり、日本語と言語的距離が近い漢字圏の国である中国、韓国の学習者は比較的日本語能力が高い傾向にある。

日本語Ⅲの授業は、『留学生のための論理的な文章の書き方』という教科書を使用し、授業目標として「論理的な文章を書く力を養うとともに、自分の考え、意見を論理的に発表する能力の育成を目標とする」と掲げられている。そして、授業は①オリエンテーション及び自己紹介、②論理的な文章の書き方の習得、③課題作成及び討論、④発表及びスピーチ、⑤レポート作成という5段階を総合的に学習し、四技能の力を伸ばすべく進められている。

意見文の課題については、前述した2つの課題「英語の早期教育」「携帯電話の早期保持」から自分の好きなテーマを選択し、600字から800字程度で書き、メールにより送信してもらうという方法で収集した。作文は授業中に書いてもらったものではなく宿題として各学習者が書いたものであるため、作文中の語彙及び漢字は各学習者が日常生活で使用しているもののみではなく辞書やインターネット上で検索して使用したものも含まれる。

また、この課題は、自己紹介の発表、よりよいスピーチの仕方、敬語を活用した自己紹介、話し言葉から書き言葉に、自動詞や受身形を使用した文、助詞の「は」と「が」の使い分け、語や文の名詞化、主語・述語の呼応、句読点の打ち方、各種記号の使い方、引用の仕方、段落構成を学習した後、出された課題である。なお、対象とした意見文の資料に関しては、①中国人学習者(30名) ②韓国学習者(17名) ③漢字圏以外の学習者(22名)という3つのグループに分け、分析を行った。

### 3. 作文資料のレベル別判定結果

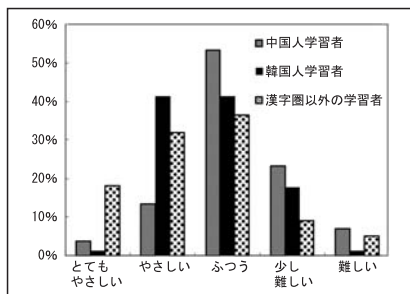
#### 3.1 語彙判定結果

意見文の作文課題中に見られる語彙について東京国際大学の川村が開発した「日本語読解支援システム リーディング・チュウ太」(<http://language.tiu.ac.jp/>)を使用し<sup>1)</sup>、グループごとにレベル判定を施した。具体的には、「リーディング・チュウ太」内の「語彙チェッカー」を使用し、日本語能力試験の4級から1級語彙の出題基準に準拠した語彙レベルの判定を行った。なお、日本語能力試験の出題基準に含まれていない語彙は級外として表示されてい

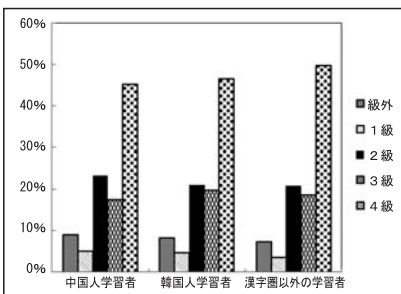
る<sup>2)</sup>。

グループごとに使用語彙の難易度を判定した結果がグラフ1に示されている。これを見ると、中国人学習者、韓国人学習者、漢字圏以外の学習者の順で使用している語彙が徐々に易くなっていることが分かる。

また、グラフ2「学習者の級別使用語彙」は、中国人学習者、韓国人学習者、漢字圏以外の学習者ごとに全ての使用語彙を級別に分けたものである。これを見ると、中国人学習者は1級及び2級語彙の使用率が高く、その分4級語彙の使用率が45%と低くなっている。一方、漢字圏以外の学習者は4級語彙の使用率が50%であり、それに比例して1級及び2級語彙の使用率が低い。韓国人学習者は両者の中間ぐらいに位置し、4級語彙使用率は中国人学習者と並みだが、漢字圏以外の学習者と比較し、3級語彙及び1級語彙の使用率が若干高くなっていることが分かる。



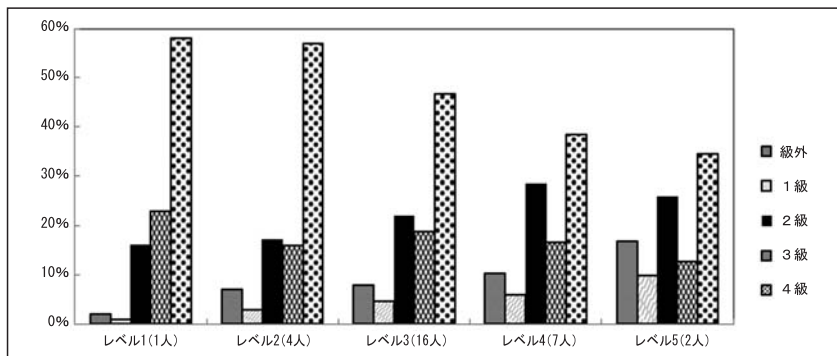
グラフ1 学習者の使用語彙の難易度



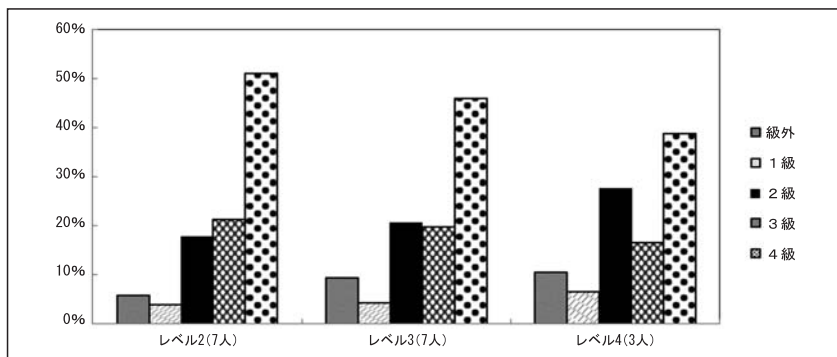
グラフ2 学習者の級別使用語彙

次に、各グループの難易度判定に即した語彙レベルの判定結果を示したものが、グラフ3「中国人学習者」、グラフ4「韓国人学習者」、グラフ5「漢字圏以外の学習者」に分けて表示されている。

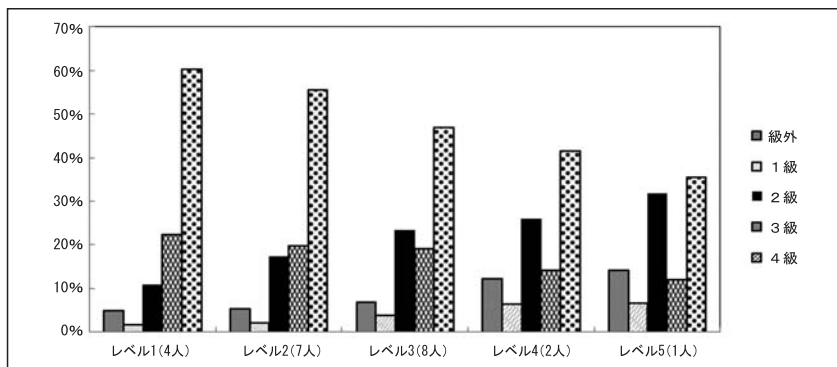
これらのグラフを見ると、各グループの難易度判定に即した語彙レベル判定の結果においては、難易度が高い学習者ほど1級語彙及び級外の使用率が高い傾向が見られるが、全体的な傾向として、基本的な語彙である4級レベルの語彙が最も多く使われ、2級、3級、1級及び級外と次第に使用語彙数が減っていくことが明らかになった。



グラフ3 中国人学習者の作文中の使用語彙



グラフ4 韓国人学習者の作文中の使用語彙



グラフ5 漢字圏以外の学習者の作文中の使用語彙

### 3.2 漢字判定結果

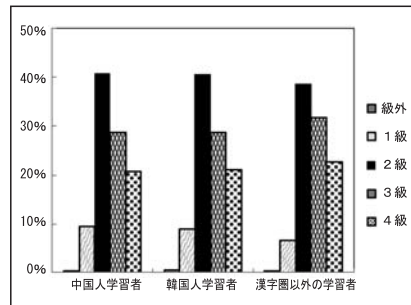
3.1と同様「リーディング・チュウ太」内の「漢字チェッカー」というツールを使用し、意見文の作文課題中に見られる漢字について、グループごとに日本語能力試験の出題基準に準拠した漢字レベル判定を実施した。

上述したように意見文の課題は授業中に書かせたものではなく各学習者が宿題として自宅や図書館等のパソコンを使用して書いたものであるため、作文中の漢字は自分が習得し自在に書ける漢字ではなく、理解して使える漢字である。つまり、授業中に作文を書いた場合使用できない漢字であっても、パソコンの変換機能を利用し学習者が認識した上で使用している漢字ということになる。

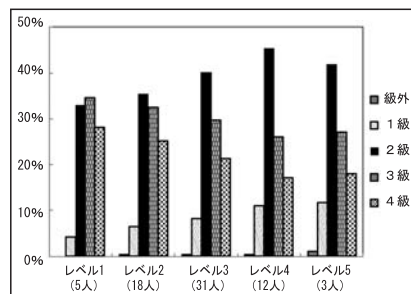
グラフ6は、中国人学習者、韓国人学習者、漢字圏以外の学習者の作文中の級別使用漢字を異なり字数で表したグラフである。これを見ると、全体的な傾向として、2級、3級、4級、

1級レベルの漢字の順に使用率が段階的に減っていることが見受けられる。また、相対的に中国人・韓国人学習者は漢字圏以外の学習者に比べ、1・2級の漢字使用率が高く、3・4級の漢字使用率が低いことが分かる。具体的には、中国人学習者の1級漢字使用率が10%程度なのに対し、韓国人学習者は約8%、漢字圏以外の学習者は約6%となっており、一方、3・4級の漢字使用率は中国人及び韓国人学習者がそれぞれ28%、20%程度なのに対し、漢字圏以外の学習者は約32%、約23%である。

グラフ7は全学習者の作文の語彙レベルに即した級別使用漢字のグラフである。概観すると、語彙レベルが低い学習者は4級、3級の漢字の含有率が高く、語彙レベルが上がる

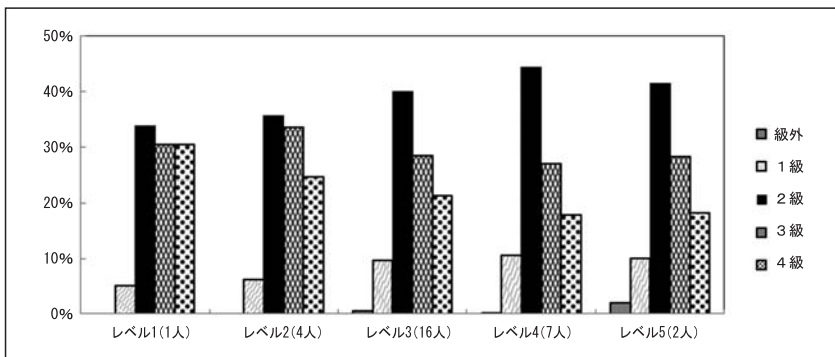


グラフ6 学習者の級別使用漢字

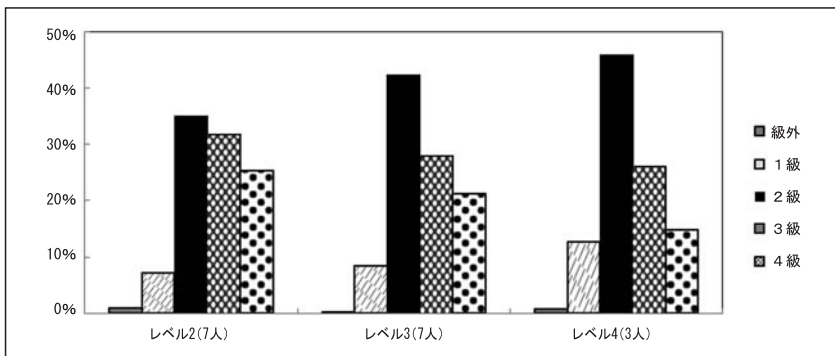


グラフ7 全学習者の語彙レベル別使用漢字

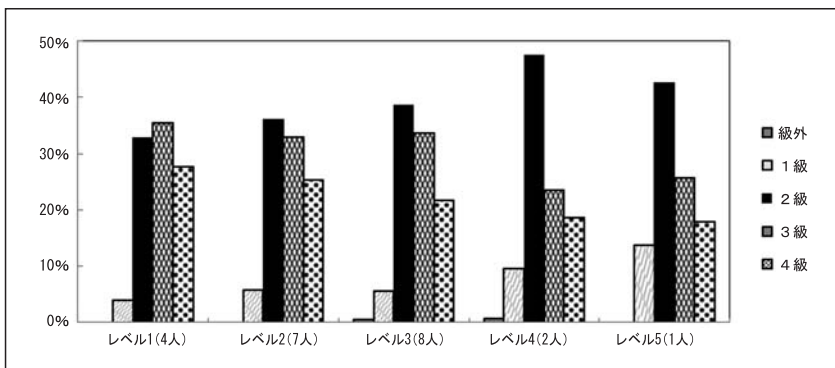




グラフ8 中国人学習者の作文中の使用漢字



グラフ9 韓国人学習者の作文中の使用漢字



グラフ10 漢字圏以外の学習者の作文中の使用漢字



につれて4級、3級の漢字の使用率が減少していくことが分かる。それに比例し、2級及び1級の漢字使用率の上昇が見取れる。語彙レベルが低い学習者は3級、2級、4級、1級の順で漢字の使用率が低くなっているが、語彙レベルが上がるにつれ、2級、3級、4級、1級の順で漢字が使用されていることが分かる。

各グループの漢字レベル判定の結果は中国人学習者がグラフ8、韓国人学習者がグラフ9、漢字圏以外の学習者がグラフ10に示されている。中国人及び韓国人学習者は、作文中の語彙レベルが低くても2級、3級、4級、1級の漢字の順で使用されており、使われている漢字のレベルは必ずしも低くはないことが分かる。一方、漢字圏以外の学習者の場合は、語彙レベルが低い学習者の場合、3級、2級、4級、1級の順で漢字が使用されており、学習した漢字以外はなかなか使いこなせない状況が見取れる。また、各グループにおける語彙レベルの高い学習者の場合、2級の漢字が40%以上を占め、3級、4級、1級の漢字の順で使用されているが、1級の漢字も10%以上使われていることが分かる。

### 3.3 学習者の作文中の外来語

学習者の作文語彙中にある外来語の使用（固有名詞は除く）について調査したところ、異なり語数で中国人学習者は51語、韓国人学習者は30語、漢字圏以外の学習者は26語が使用されていた。一人あたりの作文につき、中国人学習者で1.7語、韓国人学習者で1.8語、漢字圏以外の学習者で1.2語が使われ、全く使用していない学習者も中国人学習者で3名、韓国人学習者で1名、漢字圏以外の学習者で2名いた。3グループに共通して使用されていた語としては、4級語彙で「ニュース」、2級語彙で「メール」「コミュニケーション」「ゲーム」、1級語彙で「ストレス」、級外で「インターネット」があり、日常生活でよく使われる言葉が多いことが分かる。

## 4 中国人学習者の作文中に見られる誤用分析

母語干渉はどの言語の場合もある問題だが、中国語ネイティブの日本語学習者の場合、母語干渉は特に漢語語彙や中国語的表現による干渉、直訳による干渉等が多く見られる。本稿の考察対象になっている中国人日本語学習者の作文（意見文）も、こうした問題が多く見られる。以下にその具体例を挙げる。なお、下に挙げる例は学生の作文からそのまま引用しているので、文

法的な使い方による誤用も多く見られるが、本稿では語彙選択を中心に母語干渉の問題についてのみ考察を行う。

例①「……子供というのが頭が真っ白でどんなことでも……」

中国語では、子供のことを「純粹で、白い紙のようにどのようにも染まる」と例えて表現することがよくあるので、その発想から、上記のような誤用が生まれたのではないか。一方、日本語では、何かのショックにより「頭が真っ白になった」と使われることが多い。

例②「子供が小さいとき、頭の中になにも考えず、……、頭に簡単し、……」

例①の表現と発想が近いところがあり、物事を深く考えない、頭が単純の意味を表す中国語「头脑简单」をそのまま日本語にしている例である。

例③「英語はただ一つの国だけ使っている言葉ではなく全世界の共同言葉になった。」

「共同言葉」は中国語の「共同语言」の影響か、ここでは「共通語」とすべきである。

例④「10歳前の子供は脳が成長している時期だから、外界の色々なことを、たとえば、常識、文字、……」

中国語の「外界」をそのまま使っている例であり、「外の世界」と言いたかったのだろうか。また、「常識」は「一般的な知識」の意味として使われているので、日本語では「知識」と使うべきであり、いわゆる同形異義語による誤用である。

例⑤「中国では幼稚園から英語を勉強し始める地区はまた多くなった。」

中国語の「地区」をそのまま使っている例であり、「地域」や「ところ」の意味で使っていると思われる。

例⑥「外国語を勉強する最適年齢は十歳ぐらいだからという理由である。」

「最适合学习外语的年龄/外国語を勉強するのに最も適した年齢」のような表現により、「最適年齢」のような誤用が生まれたのであろう。

例⑦「小学生の年齢は10歳ぐらい、このとき、事物の理解とか、あまり深くない、……」

これは中国の「事物」をそのまま日本語に当てはめて使っている誤用例であり、日本語では二つの漢字を逆転して「物事」となる。

例⑧「母国語の基礎を固めることは小学生だけするべきではなく、学校もそれを重点にしなければならない。」

後半の文を中国語に直すと「学校也应该把其作为重点。」となり、「学校もそれを『重視』しなければならない」または「学校も『重点的に』それをやるべきだ」と言える。

例⑨「幼年時期は、よい習慣を身につける大切な時期なので、新しい言語を勉強し始め、その学習仕方も子供に対していい経験であろう。」

幼年は中国語では「3歳ころから10歳前後の年齢」を指し、日本語では「物心がついてから後、小学校に入学するころまでの年齢(の子供)」を指すので、中国語と日本語における「幼年」の定義にずれがある。この場合、作文のテーマが「英語は小学校低学年のうちから勉強するべきか」となっているので、日本語で「幼年」を使うのは明らかに間違いであり、「幼少期」とすべきであろう。

例⑩「最近の携帯にはGPS 効能がついているのはほとんどである。

日本語では「機能」と使うべきところである。中国語では「功能」が使われるが、日本語の「効能」は「功能」とも書くので、「GPS 効能」の誤用は中国語による干渉と考えられる。

例⑪「時代の発展とともに、携帯はもう普通の自転車みたいに誰でも使っている、……」

中国語では「随着时代的发展」と表現できるが、日本語では「時代の発展とともに」は違和感がある。

例⑫「今、経済発展に従って、“携帯電話は小・中学生にも持たせたほうがいい”という考え方がある。」

日本語の「～に従って」と「～にともなって(にともない)」はどちらも

中国語では「隨着～」となるため、例⑫の「經濟發展に従って」の誤用もそれによるものであると考えられる。

例⑬「これは悪人に襲われた場合に効くだけではなく、学校で行われる遠足や、……」

「悪人」に該当する中国語は「坏人」であり、中国語では「坏人」という言葉は日常的にも使われるが、例⑬の場合、日本語ではあまり聞き慣れない使い方である。

例⑭「校則で授業中携帯禁止、違反者は少し適当に罰すると規定されれば良いと考えられる。」

例⑮「適当にゲーム、インターネット、メールをするのはいいだが、やはり小・中学生は自分を管理する能力は十分持ってないので、携帯電話でよくゲームするのは、本来の目的と違う。」

中国語と日本語の両方に「適当」という語があり、中国語の場合、「适当」は「適當である；妥当である；ふさわしい」の三つの意味がある。一方、日本語の場合は、「適当」は一つはある状態や目的などに、ほどよくあてはまること。もう一つは、その場に合せて要領よくやること。いい加減の意味で使われている。「適当」は、中国語と日本語において、その用法は一部重なるため、例のような誤用が生じたのだろう。例⑭と⑮はそれぞれ「適宜、ある程度」、「節度をもって」のような表現に換えればしっくりする。

例⑯「小・中学生はあまり自覚しないので、授業中に携帯電話でゲームしたりメールを送ったりする人が少なくないと思う。」

文中の「自覚しない」はおそらく中国語の「不自覚」の直訳による誤用であろう。

例⑰「授業中に携帯が鳴ったら、学生は勉強を集中できなくなり、授業中のメールも教室秩序の妨げとなることである。」

例⑱「授業中のメールが教室秩序の妨げになる」

例⑰と⑱は二人の学生の作文から抜き出した誤用例であるが、文が驚くほど似ている。母語干渉のいい例である。おそらく「教室のマナーを乱す」の意味で使われていると考えられるが、中国語では「教室秩序」はよく用いら

れる表現である。

例⑱「学生が携帯電話があった後に、教室の上で紀律の現象を守らないで間違いなく増加することができる。」

例⑱の文を書いた学習者の脳裏に「会出现不遵守课堂纪律的现象」のような中国語があったのではないかと想像がつくほど、中国語の発想法によって作られている一文である。

例⑳「小・中学生の生活が相対に単純なので、大部分な時間が家と学校で過ごし、親が子どもと連絡することが難しくないなので、決して必需品ではないだ。」

中国語の「相対」は日本語の「比較的」「相対的に」に該当し、例㉑は「相対的」よりも「比較的」のほうが落ち着く。

例㉒「小・中学生はまだ携帯電話は奢侈品ともいえる。」

日本語にも「奢侈」が存在するが、例㉒は中国語をそのまま用いられていると考えられる。この場合、「贅沢品」とすべきであろう。

例㉓「小・中学生はまだ成長しているが、免疫力が大人より弱くて、携帯電話から出た輻射が健康に悪い影響を与え、出来る限りあまり使わないほうがいいと思う。」

例㉓の「免疫力」と「輻射」はどちらも日本語に存在するが、「免疫力」は病気に対して、また、携帯電話の場合は「電磁波」のように使われる。一方、中国語では比喩的に「免疫力」を使ったり、また、携帯電話の電磁波を「輻射」と使われたりするの是一般的であり、例㉓は語の使用範疇に見られる不自然さと考えられる。

例㉔「これは親たち子供に携帯を持たせるもっとも重要な原因となる。」

この文の前後の文脈から中国語なら「原因」と使ってもとりあえず成り立つ表現であるが、日本語の場合、「原因」よりも「理由」を使うべきであり、また、前の修飾語も「主な」に直した方が妥当と考えられる。

例⑳ 「この金は多半親から負担している。」

例㉑は「たぶん、おそらく」の意味で用いられる中国語の「多半」をそのまま使った誤用例である。

例㉒ 「私個人は、携帯電話の普及は社会の絶え間ない進歩を体現していて、学生は社会の新生代として、ついて行くこのような潮流はとても正常だと思っている。」

文のねじれや誤字もかなり気になるが、ここで使われている「体現」は「表れ」と直すべきであろう。広辞苑によれば、「体現」は「思想・理念などを具体的なかたちに現すこと」とある。一方、中国語の場合、「(ある事物がある性格を)具体的に表す、具体的に表現する」の意味で用いられる。例㉓の場合、筆者が意図していることを「体現」を使って表現しても文脈上おかしくはない。

例㉔ 「携帯電話を配置してどれだけ大きいかの必要がない。」

「配置」は「配備」の誤用か。また、「大きいかの必要」はなかなか意味が読み取れなかったが、このセンテンス全体で考えた場合、おそらく「配備手机有多大的必要呢。／携帯電話を持たせるのは果たして必要だろうか。」、あるいは「配备手机没有多大的必要。／携帯電話を持たせる必要はない」のようなことを言いたかったのではないか。「多大 → どれだけ大きいか」の直訳かと考えられる。まるで機械翻訳によって作られたような一文である。

例㉕ 「携帯電話を遊ぶことを許すのは金銭の行為を浪費するのだ」

下線部の表現から「(是一种)浪费钱(金钱)的行为」の中国語文を想像する。「お金を無駄遣いすることになる」と言いたかったのだろうか。

例㉖ 「事実の証明、携帯電話の輻射は青少年の脳の部の神経に対して損害をもたらすことができ、頭が痛くて、記憶力が睡眠の不調に減退することをと引き起こす。」

中国語の「事实证明」という表現がそのまま使われている。直訳すれば「事実が証明するように」あるいは「事実が語るように」となる。 「研究によれば～の実例が挙がっている」のような表現に言い換えられる。この例もかなり文のねじれが見られる。

## 5. 日本語学習者の作文中の語彙・漢字及び誤用分析

漢字圏である中国人学習者・韓国人学習者及び漢字圏以外の学習者の意見文中に見られる作文語彙を分析したところ、仮説通り中国人学習者、韓国人学習者、漢字圏以外の学習者の順で次第に日本語能力試験に準拠した語彙のレベルが低くなっていることが分かった。また、学習者の作文中の語彙は、4級、2級、3級、1級の順で含有率が徐々に低くなっていくことが確認された。一方、学習者の作文の難易度別に語彙レベルの構成を比較すると、作文の難易度が高い学習者ほど作文中に1級及び級外の語彙が占める割合が高くなっていた。

表1は、日本語能力試験の語彙リストに載っている語彙を語種に分けたものである。これを見ると、4級語彙及び3級語彙は和語が6割から6.5割程度、漢語が2.5割から3割程度を占めているが、2級は和語と漢語の割合が同等の4.5割程度、1級は和語が4割、漢語が5割程度と漢語の占める割合が高くなる。

このように、日本語能力試験の語種と比較して考えると、4級の語彙は日本語を学習する上で根幹をなすこと、学習者は初歩的な4級の語彙は普段から使用することが多く、話し言葉においても頻繁に使われることから、4級語彙が占める割合が最も高い。続いて、2級、3級、1級の順で語彙の含有率が減少していくが、日本語能力試験出題基準では基本的な語彙である3級語彙1,500語程度に対しやや高度の2級語彙は6,000語程度と定められている。また、認定基準によると、3級は「日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力」、2級は「一般的なことがらについて、会話

表1 日本語能力試験における語種 単位：語(%)

	和語	漢語	外来語	混種語	総語彙数
1級	3,369 (42.1%)	3,932 (49.1%)	540 (6.7%)	168 (2.1%)	8,009 (100%)
2級	2,344 (46.6%)	2,251 (44.7%)	332 (6.6%)	108 (2.1%)	5,035 (100%)
3級	881 (62.5%)	400 (28.4%)	107 (7.6%)	21 (1.5%)	1,409 (100%)
4級	489 (67.2%)	169 (23.2%)	61 (8.4%)	9 (1.2%)	728 (100%)



ができ、読み書きできる能力」という基準である。つまり、2級の語彙は一般的な学校生活における学習語彙も多少含んだ日常的な語彙ということができ、3級語彙よりも語彙数が4倍程度多く範囲が幅広いため、含有率の逆転現象が起きていると考えられる。また、「英語の早期教育」及び「携帯電話の早期保持」が意見文のテーマであるため、使用される語彙もやや高度の語彙にならざるをえない。さらに、漢字圏の学習者にとっては、漢語の占める割合が高い2級、1級の語彙は漢字圏以外の学習者と比較すると、母語と日本語の言語的距離の近さから比較的容易に習得できる。そのため、相対的に中国人学習者の語彙レベルが高く、韓国人学習者、漢字圏以外の学習者が続くという結果が得られたと思われる。

なお、韓国語は日本語と同じウラル・アルタイ語族に属し、言語的距離が極めて近い言語である。SOV構造で文が構成され、膠着語で助詞や助動詞も存在し、文法も非常によく似ている。その上、韓国語にも固有語とともに漢語系語彙があり、漢字も使われる。しかし、近年韓国では韓国固有の表音文字であるハングルで表記するのが一般的であり、日本語のように漢字仮名交り文で表記されることはほとんどない。そのため、漢語系語彙といっても漢字と結び付けて意識されることはあまりなく、その違いが中国人学習者との使用語彙においてレベルの差になって表れたと考えられる。また、韓国人学習者の語彙使用の傾向として、上級レベルになればなるほど日本語らしい表現を重視し、あえて漢語系語彙ではなく和語系語彙を選択するという調査結果（大塚2001）もあり、語彙レベルが中国人学習者よりも非漢字圏学習者に近くなっていると言える。

次に、作文中の漢字使用については、全体的な傾向として、2級、3級、4級、1級レベルの漢字の順に使用率が段階的に減少しており、相対的に中国人・韓国人学習者は漢字圏以外の学習者に比べ、1・2級の漢字使用率が高く、3・4級の漢字使用率が低いことが分かった。同様に、語彙レベルが低い学習者は4級・3級の漢字含有率が高く、語彙のレベルが上がるにつれて4級・3級の漢字の使用率が減り、それに比例し、2級及び1級漢字の使用率が上昇していた。語彙レベルが低い学習者は3級、2級、4級、1級の順で漢字の使用率が低くなっているが、語彙レベルが上がるにつれ、2級、3級、4級、1級の順で漢字が使用されていることが明らかになった。

漢字使用の結果も日本語能力試験の認定基準に沿って考察すると、4級が初歩的な漢字100字程度、3級が基本的な漢字300字程度、2級がやや高度の

漢字1,000字程度、1級が高度の漢字2,000字程度と定められており、4級・3級の漢字と比較し2級・1級の漢字は絶対数がかなり多い。また、上述したように2級レベルは一般的なことがらに対応できる日本語レベルであり、学習者が作文中に使用する漢字についても意見文という性質上、やや高度の漢字が要求される。そのため、全体的な傾向として2級漢字の使用が多くなっていると考えられる。また、語彙レベルが低い漢字圏以外の学習者は、漢字のレベルも相対的に低く、学習した漢字は認識し使用することができるが、それ以上のレベルの漢字使用はパソコンの変換機能を利用しても困難を伴うことが分かる。一方、漢字圏の中国人及び韓国人学習者は語彙レベルが低くても使用漢字のレベルは一定の水準を保っている。これは、母語の日本語との言語的距離の近さが原因だと考えられる。

作文中の外来語については、日常的な語彙が使用されている傾向があり、漢字圏の学習者の方が非漢字圏の学習者より使用率が高かった。この点に関しては、今後日本人母語話者の作文調査を実施し、外来語使用について日本語学習者との比較調査を行った上でどのような傾向があるのかを明らかにしていきたい。また、学習者の作文を母語で訳してもらうことにより、より詳細な調査が可能になると思われる。

さらに、中国人学習者の作文中の誤用の分析結果をみると、中国語の漢語語彙の直接的な使用や中国語的表現、直訳による母語の干渉が多く見られることが分かった。母語の干渉はどの言語でも見られるが、漢字圏の学習者である中国人学習者及び韓国人学習者の場合、日中及び日韓同形語においては意味や用法上の問題が生じやすい。具体的には、日本語と中国語・韓国語で品詞が異なることにより生じる文法上の問題（例：参考する、必要する）や意味のずれから生じる不自然な使用（例：手紙（中国語ではトイレトペーパーの意）、言論（韓国語ではマスコミの意））及び共起（例：時計が走る、時計が死ぬ）等である。

また、学習者の作文中には、書きたい語を辞書で母語から調べ使用する場合、辞書に記載されている語を文脈を考えずにそのまま使用しているケースも考えられる。その結果、表現意図を読み手に伝えるという次元においては目的を達成しているかもしれないが、日本語母語話者にとっては不自然な印象を与える表現が少なくない。中上級レベルの学習者には、文脈を踏まえた語彙選択が求められるとともに、不自然さを調整する日本語力が必要になる。

## 6. まとめ

以上のような学習者の作文中に見られる語彙調査結果に基づき、母語を踏まえた語彙及び漢字教育の必要性を感じるとともに、学習者が日本語の不自然な使用に自ら気づき調整するために必要な作文教育方法について今後、検討していきたい。中上級レベルの語彙指導から見た作文教育方法を検討していくにあたっては、以下の4点を考慮した指導をしていくと有効だと考えられる。

- ① 文脈を踏まえた語彙指導
- ② 和語系語彙・漢語系語彙等関連語彙の同時提示による指導
- ③ 類義語のネットワーク構造を意識した指導
- ④ 話し言葉から書き言葉への指導

①については、語彙及び漢字をその単語のみを取り上げ間違いを指摘し指導するのではなく、文脈に合わせた指導方法が必要になる。その際、漢字圏の学習者に対しては、母語における漢字語を踏まえた指導が有効になる。また、②については、日本語には和語系語彙、漢語系語彙、外来語で意味用法が変わる語（例：速さ、速度、スピード）があり、そのニュアンスの変化を使用方法を例示しながら指導したり、③については、類義語を語と語の関係性が分かるよう語のネットワーク構造を階層的に考えさせたりする指導が有効だと思われる。さらに、④の話し言葉でのみ使用される語彙から書き言葉で使用する語彙への指導も必要であり、特に書き言葉でも日常的な文章や発表等で使われる「軟らかい書き言葉」と論文等で使う「硬い書き言葉」には違いがあることを指導していくことにより、場面に合わせた論理的な文章が構成されることになることを認識させる必要がある。同時に、文レベルの指導と並行して文章の構成を考えさせる指導をしていくことにより、今後、中上級レベルの学習者が論理的な文章力を養うことができる作文指導法を考察していきたい。

## 注

- 1) 「日本語読解支援システム リーディング・チュウ太」は、1999年にインターネット上に公開された学習支援ツールである。このシステムには辞書ツール、レベル判定ツール、読解教材バンク等がモジュール化されて組み込まれ、有機的に統合された学習環境になっている。
- 2) 日本語能力試験に準拠した語彙レベル判定は『日本語能力試験出題基準[改定版]』

による。ここでは、日本語能力試験の4級から1級について基本語彙をそれぞれ定め、試験の総語彙のおおむね80%をその語彙表から出題するとされている。4級は1,000語中728語、3級は1,500語中1,409語、2級は6,000語中5,035語、1級は10,000語中8,009語が認定されている。なお、級外は1級から4級語彙に含まれていない語ではあるが、上記の基準により必ずしも1級以上のレベルだとは限らない。

#### 〈参考文献〉

- 大塚薫(1999)「韓国人日本語学習者の語彙認識力に関する考察」『日語教育』第16輯、韓国日本語教育学会、pp.281-300
- 大塚薫(2001)「韓国人日本語学習者の語彙認識に関する一考察 和語系統の語彙と漢語系統の語彙の提示方法に関する考察」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』(平成11-12年度科学研究費補助金基盤研究(B)1)課題番号:国11691041研究代表者:前田(宇佐美)洋)国立国語研究所日本語教育センター、pp.33-45
- 河住有希子(2009)「中国語母語話者による日中同形語の学習方法について」J S L 漢字学習研究会発表資料
- 川村よし子(2009)『チュウ太の虎の巻 日本語教育のためのインターネット活用術』くろしお出版
- 顧偉坤・中野洋(1998)「中日作文に見られる母語の影響」文部科学省研究費(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(研究代表者:水谷修、課題番号:09NP0701)『研究論文集1』総括班
- 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会(2002)『日本語能力試験出題基準(改定版)』凡人社
- 国立国語研究所日本語教育センター(2001)『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』(平成11-12年度科学研究費補助金基盤研究(B)1)課題番号:国11691041研究代表者:前田(宇佐美)洋)
- 佐藤醇(編集代表)(2002)『中日辞典』第2版、小学館
- 新村出編(1998)『広辞苑』第五版、岩波書店
- 中野洋・張建華・林翠芳(1997)「中国人の日本語文章における中国語の影響」『言語処理学会第3回年次大会発表論文集』言語処理学会
- 林翠芳(1999)「日中作文コーパスに見られる副用語について」文部科学省研究費(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(研究代表者

：水谷修、課題番号：10NP1001)『表記・表現に関する実験的研究』研究班3(研究分担者：中野洋)

おおつか かおる(高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門准教授)

LIN Cuifang(高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門准教授)